# 富士吉田白糸瀧

成田凜

星が落ちている
その森は春
午後六時富士北東白糸の瀧、星の迷い子、山間は雲霧のさなかに包まれ、月の出る夕暮れ、峠道はこの先車で行くべからず、わたしたちは歩いて星昇り、土踏み、草分け、橋渡り、石も苔も話しているみたい、千言万葉、ちゃるちゃる話しているみたい、話し声って音波にされてだんだん砕けて壊れて届くみたい、ちるちる石声苔声の跡が窪む、窪みに落ちる木漏れ星の古いこと、数億年、数億年前の壊れた声が反射する、目に刺さる、涙、目が霞む、霧がいっそう深まる

下見の瀧まであと五分、白糸の瀧まであと十五分だって。ここからわりと山登りになるのかも。……。そこはそっちに曲がって。こっちは休憩所だから。ここ滑りやすいかも、っ……。……。足が増えたみたい。そこの岩階段、気をつけて。なんかこっちを見てる。雨だと思ったら霧だったらしい。霧だと思ったら雲だったみたい。わたしたち、雲のなかに来ちゃったのかも。下見て、もうこんなに登った。ね。滝の中、見える？　滝ってなにでできているか、知ってる？

この森で手がおかしい。
この森で膝がおかしい。
わたしの体が冷たい。冷気で服に穴が空く。
目が痛む、妙に明るくて痛む。この光は。
星がおかしい。足元で白く輝いて、天になにもない。
階段　その森　ある気配

髪の先まで濡れている　霧滴れる　噂がある　この森で　龍を見た　行きに一匹、
行きに一匹、帰り一匹、これが普通なのだけどね、もしね、一匹しかいなかったらね……どう！　びっくりしたあ？　おばあちゃんね、魔女なのよ。龍なんてね昔からこーんなにたくさん見てきてね、龍が胸のなかんとこにすううってきちゃったらあんた気をつけなさいよお、お腹のあたりがね、ぜーんぶ龍になっちゃう。そうなっちゃったらねえ、どうしようもないんだけどね、おばあちゃんはね、魔女なのよ。昔ね、龍にされたときにね、こうやってね、ふんと気張ってね、ひゅるひゅる出したのよ！　出してやるとねえ、悲しい気持ちになるんだけどねえ、なんだかかわいくも思えてきちゃってね、そしたらね、なにしてるの！　って言われて、気がついたらね、トイレに座ってたのよ。さっきまでね、山の奥にいたのにね。ぽんっとね、びっくりしたのよ。

午後六時十五分富士北東白糸の瀧、上昇すること十メートル、横幅一メートルの山道が霧雨に溶かされて、樹幹に交わった、看板に交わった、ロープに交わった、人影に交わった、交わりながら溶けた、歩いていることがいつしか変わるということになる、あと何歩歩いたらわたしたちは山になるのだろう、あと何歩歩いたらわたしたちは川になるのだろう、あと何歩歩くことが許されるのだろう、あと何歩分、何歩分の時間、何歩分の時間が過ぎて、東屋が見えてくる、四辺が青冷めているのに気がつく、霧の一粒一粒が浮き上がる、時が止まる、星が止まる、白糸の瀧。

星が止まったんは今年が初めてではなくて、およそ百年前、この町が蚕を育てていた頃、そうそう、あの春にも止まったんだよ。満天がね、木木がこうやってね覆い立っているのにね、夜中の満天はね、白く見えるんだよねえ。空って青いだとか黒いだとか言うでしょ、それはね、わたしたつが白いまんまでいるからそうなるんだよぉ。わたしたつが黒くなってみりゃね、空の方が白くなる。お空が白くなってぇ、生きてるもんみんな黒くなって、止まる

んだよ、星が。星が止まるっでだっで、なんもないけどねぇ、お願いごとが叶うだとか、そういうことはないけども、星が止まるとねぇ、お空がぜんぶ真っ白になって、光が落ちてくるんだ。回ってたときはね、落ちてこなかったものが、止まったから落ちてくるってことだあよ。落ちた光はだ、地面だとか水仙とか、さざれ石とか、瀧水とかにばっぱって散らばってさっていってね、そんでそのときに光もらったもんがね、光るんだよ。お前たつも光るんはきっともらったんだねえ、生まれてくる前に、星っこもらって通ってきたんだよ。

午後六時半富士北東白糸の瀧、その瀧の目下、煌煌たるや水の鳴き声、幾線の白い糸水が二又にほとる、時刻のわからない夜、なだらかな岩崖の黒皮膚は鱗のごとく、股の有り、へその有り、腹の有り、胸の有り、首の辺りに屋根がある、あれが家かと思うと、光る二又の流水は帰り道にも見えてくる、耳を澄ませばちっちっ数千の跳ね返す小川っこたちの崩れ石とのたわむれ、光ってふりそそぐ霧雨、息がつまる、青い月明かり、月齢一四・四、空が真白い、わたしの手が白い、わたしたちの顔が白い、靴紐が白い、瀧糸が異白い、目が白い、服が白い、髪が白い、痛く白い、なぜだか光っている、空も山も人も水も光っている。

帰り道は、ない。

わたくしも、昔はよく歩いていたものですよ。いまは星の方が歩いてくれて、すっかり寝てしまっているばかりですが、いったんこうして山になって仕舞えば、そう悪くはないのです。わたくしは、このようにまっすぐ胴の長いからだですが、頭と尻尾の先が遠く遠くなってしまえば、幸せがはいってきてその先どうなるのかも、不幸せがはいってきてその先どうなるのかも、いっさいのことがわからないままに、悠悠といるばかりになりますから、幸せの涙と不幸せの涙を二眼から二又に流して、どちらになっても良いように、泣き続けているのですよ。わたくしも昔、白糸と呼ばれた娘であった頃、ちょうどあなたと同じ年頃でしょうね、その頃にお星さまが落ちてきて、そのい

っぺんのかけらが目のなかに入ってしまったことがあるんです。このあたりは、星降り峠と言って、星がそうやって降ってくる場所なのですよ。そうしたもののひとつが、胸の辺り、ちょうどいまあなたがいる辺りに落ちてくると、こうやってじぐじぐと胸が痛むのでしょう。痛んだままに、わたくしたちは歩いてゆく。歩いてゆくだけ、変わってゆくだけ、進んで行くだけ、長い、長い瀧をくだってゆくだけ、体のなかに入ったお星さまは、出て行く時にはお水に混じって出て行くのだそうです。出て行った先こそわたくしの涙。あらがほなそ、あらがほなそ、なそ、ふぁさがれのいとの、しらいとだきの、天くだるかえりじのしらしらしらしい山分けみちに光る白糸の木漏れ星、星の光ること数億年、わたくしの前に、光る道がある。

午後七時半、帰宅。

星が落ちている
迷い星
家のなか
グラスのなか
お風呂のなか
立ち上がると、胸から水の揺れる音が聞こえてきた
らぷ
瀧の音
らぷ
らぷ
光　も　もしかして　星　に　帰りたい？

午後九時、再び富士北東白糸の瀧、下方百五十メートル、休憩所。明かりを消す。月齢一五・四。月明かりが青い。瀧水は白い。山肌は黒い。倒木は青黒い。看板は青白い。目を澄ます。音に聞く。さざめく。生きている水の匂いがする。生きている山の揺れがする。その森は春。春はまだ肌寒い。息が

白い。霧を吐く。息が青い。龍を吐く。天に昇って行く。上昇すること数千メートル。ぴっぴっ。らあらあ。声を出す。わたしたちの声、壊れているみたい。ざっざっと声がでる。ぴっぴっ。思ってもない音がでる。音波は壊れて届く。迷い星。幾つもの小波にのって、星のかけらがわたしの耳に刺さる。痛いみたい。龍が噛みついて痛いみたい。そういう夜がある。樹樹をくぐる。そして歩く。午後十時、帰宅。